



リステラス星圏史略
古資料ファイル
3 - ? - 0



「青い鈴の花の草原」
(暗闇の童話集)

(発掘整理一旦完了)

霧樹里守 is 土岐真扉

「まったく失礼しちゃうわ！」

薄暗い地下鉄の中で竜子がかawaiiほっぺたを真っ赤にふくらませていました。

ママと喧嘩して家を飛び出してきたばかりなのです。

「いつまでも子供あつかいしないでほしいわ。あたしだってもう8つなんだから。」

竜子は、自分はもう充分大きくなったと思っていました。

だって、一人でお留守番もできるし、お使いだって、お洋服を着るのだって、大人に負けないうらい早くできるのです。

それなのにママったら.....。

「電車にだって一人でちゃんと乗れたじゃないの。 :

竜子の手には20円の入場切符がしっかりとにぎられています。

コットン コットン コットン コットン コットン ...

電車は静かに歌いながら走り続けます。

地下の闇の中で、いつしか竜子は眠りこんでしまいました。

窓の外を流れてゆく青白い顔の水銀灯が、竜子の顔をまだらにそめていきます。

どれほどの時がたったのでしょうか。竜子はまだ眠り続けていました。

と、突然、電車に急ブレーキがかかって、竜子は気持ちのいい座席のクッションの上から冷たい床の上へと、放り出されてしまいました。

「いったァい！ 電車さんのいじわる!!

人が気持ち良くお昼寝してるときに、落っことすことないじゃない！」

でも、起き上がった竜子の目に電車の姿は写りませんでした。

竜子のまわりには何も無かったのです。遠くでかすかにまたたいている星の他には
。

「お空の上に出ちゃったんだわ。」

竜子は泣き出してしまいました。

(でも別に気にすることはありません。大人だってこんな時には泣くでしょうから。
)

「おうちにかえれない。」

竜子は自分が家出の最中だなんてことはすっかり忘れて泣きじゃくっていました。

いきなり宇宙空間に放り出されれば、だれだって細かい事を気にしているわけには
いきませんもの。

「何をそんなに泣いているの？」

突然、竜子の後ろで声がしたので、竜子はびっくりしてしまいました。

こんな所に人がいるなんて!!

……でも、ふりむいた竜子の目に写ったのは、さっきまでの荒涼とした宇宙空間
ではありませんでした。

青です。

見わたすかぎり一面に広がった薄青色の草原なのです。

そして青く透きとうった美しい草には、小さな銀色の花が咲いていました。

それが、風

(未完)

(無題) 2 (中学?)

(無題) 2 (中学?)

2016年8月10日 ヒロシマ+ナガサキ<フクシマ=【地球】!!

「まったく失礼しちゃうわ！」

薄暗い地下鉄の中で竜子（たつこ）がかわいいほっぺたを真っ赤にふくらませていました。

ママとケンカして家を飛び出してきたばかりなのです。

「いつまでも子供あつかいしないでほしいわ。あたしだってもう6つなんだから。」

竜子は自分はまだ充分大きくなったと思っていました。

だって、一人でおるす番もできるし、おつかいだって、お洋服を着るのだって、大人に負けな
いくらい早くできます。

犬だって注射だって恐くないし、背たけだって今年8つのお姉ちゃまに負けません。

それなのにママったら、「竜（たつ）ちゃんはまだ小さいから」と言っっては竜子のじゃまをす
るのです。

...電車だって一人でちゃんと乗れたじゃないの...

竜子の手には20円の入場切符がしっかりとにぎられています。

コットン コットン コットン コットン コットン コットン

地下の闇の中、竜子は目をつぶって考えました。

...やっぱりあたしは大人なのよ。だって家出るのは大人だけがすることだもの...

そしてそのまま眠りこんでしまいました。

○

ジリリリリリ...

竜子はぎょっとなって飛びおきました。

スピーカーがものすごい声で駅名をまくしたてています。

...ああよかった、もう少しで乗りすごす所です。

間一髪で飛びおりた竜子は、次に自分の乗る列車がどれだかわからないことに気づきました。

行く先案内板の漢字が読めないのです。

...でも、習（おそ）わってないんだから、あたりまえじゃないの。

竜子は駅の階段を登って右にまがりました。

「たしか、おばさんの家に行くのは三番目のプラットフォームのはずだわ。」

けれど竜子は結局おばさんの家には行きませんでした。

ふいに、こんな会話を耳にしたからです。

「ねえ、あの電車に乗って、どこまでも行くと、どうなるか知ってる？」

「どうなるんだい？」

「途中で銀河鉄道に変わってね。魔法の国まで飛んで行くのよ。」

竜子は、いままでうそをつく人に会ったことはありませんでしたし、"空想する"という、（大人たちにとって）この世で一番楽しいゲームをしたこともありませんでした.....竜子にとって、自分の考えは全て"現実"だったので.....。

そこで、竜子は声の示した電車に向って一目散にかけて行きました。

○

竜子の乗った電車は暗い地下道をどこまでも走って行きます。

窓にしがみついた竜子の目の前で青い光が遠ざかってはまたやってきます。

...まるで鬼火みたいだわ。こっちへ来て、あっちへ行って。こっちへ来て。

ひとつ、ふたつ、...みっつ.....

いつになったら魔法の国につくのかな.....

やっつ... ここのつ... とお...

78まで数えた所で、竜子はまた眠りこんでしまいました。

○

ガクン！

(突然、竜子は気持ち良く眠っていた座席からほうりだされました。)

「アイタタタタ、ひざっこぞうをぶつけちゃったあァ！」

竜子はけがしたぐらいで泣きだすような弱虫ではありません。

だからこの時もペロリとツバをつけただけで、もう平気な顔をしていました。

(だれです、ツバをつけるなんてキタナイなあ、なんて言ってる人は？ そんな人はさっさと本をとじてしまいなさい。)

さて、竜子がころげ落ちた所は、前後にむかいあった座席の間で、ちょっと首を出して見れば前にも後にも同じようないすが並んでいるはず、だったのですが...

びっこをひきながら立ち上がった竜子の目に写ったのは、（いえ、写らなかったのは、と書いた方がいいかも知れません。なぜなら何も見えなかったのですから。）

一面の闇でした。

ただ、遠くの方でかすかに星がまたたいています。

「お空の上に出ちゃったんだわ。ちゃんとお家（うち）に帰れるといいんだけど……。」

竜子は自分が家出して来たことなんかすっかり忘れてしまって言いました。

いきなり宇宙空間に放り出されれば、だれだって細（こま）かい事を気にしているわけにはいきません。

と、急にあたりの様子が一変しました。

竜子が、「あっ！」と叫び声をあげる間どころか、まばたき一つするひまもないうちに漆黒の闇は消え、竜子と二つのいすは荒涼とした草原にぽつんとすわっていました。

見わたすかぎり全て草原です。

そしてそこにはえているのは、小さくてすきとおった銀の花の咲いている、美しい青色の草でした。

青い草は、弱い風にふかれるたびに、まるで11月のすすきのようにさみしげな、サラサラとした音をたてるのです。

サラサラ... サラサラ...

うっとりとして聞きほれていると、すぐ後ろで竜子を呼ぶ声がしました。

「竜子姫。」と。

「だれ？」

ふりむいたそこには短い金髪の男の子が立っていました。

年は竜子より少し上でしょうか。風変わりな白い短い服を着ています。

「わかったわ！ あなたよう精ね？ そうですね。」

手をうって竜子がさけぶと、少年は、不思議にすぎとおった青い目でうなずきました。

妖精

少年

騎士

皇子

...数年後...

「ママ、妖精って本当にいるの？」

「ええ、いるわ。」

青い鈴の花の草原

by 恒沙 真谷人

「まったくシツレイしちゃうわ！」

竜子はそう叫んで家出をすることにしました。

だって、だってお母さんたらひどいんです。

竜子は悪くないのに、全然悪くないのに、いつだって、

「妹でしょ。ガマンしなさい」

って、竜子ばかりを怒るのです。

それだけなら、まだ、いいんです。

「竜子はまだ5歳だから」

って、今度っから小学校1年生のお姉ちゃまが毎月1冊新しいご本を買って貰えることになったのに、汚すといけないから竜子には貸さなくてもいいわよ、そう約束してしまったのです。

ひどいです。

どうせ読めやしないでしょって、言うんです。

竜子はひらがななら全部自由に使えます。

カンジだって、自分の名前の分と、お姉ちゃまの教科書に載っている分くらいなら、今でももう書けてしまうのです。

...竜子は、ご本だけは、とてもよく読む子でしたから。

それで、

「まあたく、シツレイ、しちゃうわ！」

家出することにしたのでした。

○

およそ行きの灰色のワンピースを着ます。

背なかのジッパーも1人で上げられます。お姉ちゃまは出来ません。

およそ行きのバスケットにピンクのお財布と、ハンカチと、ちり紙もちゃんと入れてしまうと、忘れものはなしです。

お姉ちゃまはいつもお母さんに用意して貰います。

お友達の、竜の縫いぐるみのパフを左手に抱えて行くことにしました。

電話台の脇のメモボードに、いつもはお母さんがやるみたく、ちゃんと、

" イエデ、してきます。 "

玄関には鍵を掛けて、鍵は垣根の右から2本目の穴の中にしまうのです。

竜子は駅まで歩いて行きました。

「あのね、これ、おネガイシマス。」

ボタンはいいのだけれどお金を入れる所に背丈が届きません。

切符売り場でそばに居たおとなの人に手伝ってもらおうと、パタンとふたをめぐって1番安いと

ころのを竜子は押しました。

ちゃんとお礼も忘れません。

「おばちゃん、どうもアリガトウ。」

「お、おばちゃん!？」

あとにはまだ若い女の人がヘンな顔をして突っ立っていました。

○

改札を抜けてチョコチョコと階段をかけ上がります。ホームは1つしかなくてここは"シハツエキ"なので、間違える心配はないのでした。

電車の色はクリームイエローです。竜子の好きな、ちょっと酸っぱいケーキと同じ色合いで、この電車が地面の上を走るのはこの駅でだけなのでした。

ちゃんと中で座って待っているとベルが鳴ってドアが閉まります。走りはじめます。

長いゆるい坂を下って電車が地面の下の真っ暗にもぐりこんでしまうと、竜子はホッと息をついて背もたれに寄りかかりました。

大丈夫、これで8つ目の駅に着いて、降りれば、叔母さんの家まではすぐ側なのでした。

...まだ早い時刻なので電車の中は空いています。

竜子の乗った最後尾の車両には数える程しか人が居ませんでした。

それも、2つ3つ駅を過ぎるうちに、入れ代わっては段々に減って行くようです。

眠いなァ、と竜子は思いました。

電車の座席は気落ち良く揺れて漂っています。

青い鈴の花の草原

竜子（たつこ）六歳。小学校の一年生に上がったばかりの時でした。ある日、"新しく来たお母さん"と、ほんのちょっとした事でケンカをして、それで頭に来て、「いえで」をする事にしたのでした。

竜子はおさいふの中に貯金箱の中味を全部移しかえて、それからちゃんとポケットの中にはハンカチも入れて、家を出ます。

家から駅までは歩いて10分くらい。いつでも片一方にしか電車が出て行かない本当に小さな所です。そこで竜子はキップを買って、数えて4つめの駅で乗りかえると、今度はそこから地下鉄になっているのでした。

竜子はおばさんの家へ行こうと思っています。おばさんというのは"いなくなった"本当のママの妹で、竜子は、もうずい分と長いこと...たぶん、春と夏と秋と冬のまるまる一回づつぐらい...会ってませんでした。

おばさんの家へ行くのには、地下鉄に乗って、ずーっとずっと、電車がもう一回お日さまのある所へ出て、それから車庫の中へ入ってしまうまでの、三つほど手前の駅で降りさえすればいいのです。そこからは歩いて行けますから。

竜子は、おさいふの入った小さなバスケットかごをちょこんとおひざの上に乗けて、お行儀良くひとつだけ空いていた席に座りこみました。と、言っても、みんながすわってしまえばあとは立っている人はほんの少いで、この人たちはみんな、竜子のお家のすぐそばにある、ほんの小さな山へ、日よう日を利用して遊びに来た、その帰り道なのです。電車が思い出したように止まってみるたびに、お客さんたちは一人へり二人へりして行きました。

とうとう十八つ目の駅に止まった時には、もう途中から乗って来る人もいなくなって、竜子は三両の電車の中にたった一人ですわっていたのでした。



コトン コトトン コトン
コトトン コトン トン

音だけはたしかにきそく正しく聞こえて来るんだのに、なぜか竜子のすわっている所だけは、まるで止まっているように、ちっともゆれが伝わって来ませんでした。

すーうう。 すうー。 ...

青白いでんとうの光が、竜子が数えて行くにつれて、まるで呼ばれたようにやって来ては、またついつと、青白い顔のまま、竜子には声もかけないで、走って行ってしまいます。

コトトン コトン トン

すーうう。 すうー。 ...

ちょっと待って下さい。なんだかおかしいわね。

...やって来ては黙りこくったまま走って行ってしまふ灯りたちの中には、時々、本当に、青白い顔をして真っ白い長い髪の毛をふりみだした、悲しそうな若い女の人の顔がまざっているようです。

「どしたのかなァ。誰だったっけ？ あの人。どっかで会った事があったと思ったんだけどなァ...」

そうつぶやきながら竜子は、いつの間にかどこかから、電車の走る音にまぎれるようにして聞こえて来た、悲しくなるほどなつかしい子守り歌のせいで寝入ってしまったのです。

...電車はいつの間にか地面の下から抜け出ていました。

窓の外は、月も星も出ていないのに、一面、ただ輝くばかりに光をはじいている銀色のすすきの野原で、たけの高いその草は、ともすれば竜子のよりかかっている窓に届く程、びっしりと電車にも線路にも近づいて生えているのでした。

月も星も見えないただ群青色の空の下で、銀色に輝くすすきの野原をかきわけながら、少し土手になった所を走って行く列車が、汽笛を鳴らします。

...

○

気がつくと、竜子は、4人がけのボックスの丁度真ん中に、まるでお母さんのお腹の中にいた時のような恰好をして眠っていたのでした。

「アイタタタ...ここ、どこ？」

しばらくは、何があったのだからをさっぱり思い出す事ができませんでした。それから...

「あっそうだ。あたし、いえでしてたんだっけ...」

それから、ひざをついて起きあがった竜子は、またさっぱりわけがわからなくなったのでした。

「.....なあんにも、ない。」

そう、竜子は、家出をする途中の電車の中で居眠りをしてしまった筈なのでした。だから目を覚ますとしたら電車の中か、せいぜい見つかって連れ戻された自分の家の中かである筈なのです。

ところが...

辺り一面の、真っ平らで、木も山も川もない、青色の小さな花の咲いている、だだっ広い草原。

—そこに竜子は2つの電車の2つのシート—

(未完)

『 ◎ シリーズ・暗闇の童話集（ブラック・メルヒェン・ファンタジー）について
他。 』（@中学。）

『 ◎ シリーズ・暗闇の童話集（ブラック・メルヒェン・ファンタジー）について 他。 』
（@中学。）

2006年10月29日 [連載（2周目・最終戦争伝説）](#) [コメント\(1\)](#)

尾霧竜子（青い花or青い王子の草原） 一の木 宮
楠木りま 清瀬律子

あなり
あいるみや

外海 錦 竜子の娘？ *かもしれない*

一の木 宮（青い花の草原）の娘「尾霧竜子」、その娘、外海 錦、楠りまと妹・
律子、その血縁、清瀬律子。

すずかけ台小学校（不死の木村）
田島団地

十五夜の銀すすき、
樽台団地 言霊小学校 大和田小学校

律子（リツコ）、八歳。

お父さんが死んだ。お兄さんが死んだ。お母さんが行方知らずになった。

それで妹は遠くの小母さんの家（うち）に引きとられて行き、律子はしせつに入った。

九歳。律子はすっかり変わってしまっていた。一人で起き、一人で食べ、一人で寝た。

一人で学校へ行った。学校へ行っても一人だった。先生に当ててもらえなかった日には、一日中、ひとつことも口を利かない日も、めずらしくなかった。

十歳、律子は五年四組になった。.....

五年四組になっても、律子はいかわらず一人だったが、もう、学校へ行きたくないとか、お家（うち）に帰りたいとか、死にたいとかは、考えないことにした。五年四組には、尾霧竜子（おぎりたつこ）がいた。

律子は、尾霧さんとは話をしたことがない。それどころか、むこうでは律子の顔をおぼえていないかもわからないくらいだった。

1945 「青い鈴の花の草原」

……一の木宮おぎりたつこ、“歪空間”に迷い込み、
青い王子、白い人あなり に出会う。終戦。

1960 楠木りま生まれる。同、立子うまれる。

この年、清瀬、不意に現れ、嫁して楠木清瀬となる。

1970 楠木父子、山火事で死亡、清瀬行方不明となる。

1980

1990

2000 “学校” 清峰 鋭、国立新教育機関実験棟から脱走。

森の中で緑の少女に助けられる。

◎ シリーズ・暗闇の童話集（ブラック・メルヒェン・ファンタジー）について

どうしたって小品の連作である。

地理的な架空の小宇宙が形を成し始めている他は、
人物設定、人物相互の関係、年次設定その他一切が
未完成。むしろそのままで書き始めてしまってもよい
と思う。不可思議さが出て。

時間的なわくとしては、

終戦から21世紀つまり2000年までの55年間。

最初が終戦間際の“青い鈴の花の草原”、終しまいがこれはもう大分S・F色の濃い“学校”（鋭の話）で、登場人物の年齢層も大体この間、つまり活動範囲は小学生である。尾霧竜子は例外。

作品を書くに当たっては、心理・人物描写の文章は一切不要。材料は主にわたし自身の空想歴から取り、従って出てくる“不思議”の種類には一切わくを設けない。ひたすら天沢退二郎（と宮沢賢治？）を参考にする事。迫力のありすぎる長寿人は出ない。

◎ シリーズ・朝日ヶ森小宇宙（仮題）について

国民戦線<>人民戦線

まだH・F（ヒストリー・フィクション）的人民戦線には至らない、前段階的な、学生たち、主として中学、の裏舞台。“暗闇の童話集”の次、“新世界戦隊人民戦線”の前のS・Fとファンタジーがちゃんぽんな世界。マーシャも少し出てくるし、律子（多重生活を強いるしかないようだ）やリーナなんか。朝日ヶ森周辺の不思議と、その外で確かに動き始めている世界の異常。古いものと新しく目覚めた者たちの様々な関係。

この時点になると古いものたちの大部分はあらかた姿を消し、前はごく少数を占めるに過ぎなかった“黒いもの”と緑衣隊とが、不気味なものたちのメインとして浮かび上がってくる。それに引きかえ主人公たちの“味方”である善神たちや“白い力”は姿を失い、ごく強大な力を持つ数人の魔法使いと前哨線エスパー、新たに『科学技術クラブ』が戦列に加わる。

前後のシリーズの過渡期で、やはりブラック・ファンタジーの系列であるから、人物はそれ程大事に扱わなくても良い。このシリーズには、直接、それらしい長寿人・不思議人は登場しない。ほぼ朝日ヶ森中学部のみ閉じた世界である。

◎ 一の木宮 及び 尾霧竜子について

きつい感じの子。リーダー格。

宮の力は血統によるもので、不死の木村の不思議人たちに属し、他所者の得体の知れないのと幾晩も行方をくらましたり、たばこめいたものを持ち歩いたりしているので、世間からは不良と目されている。

竜子が“知って”いるのは『青い鈴の花の草原』以来で、青い王子に与えられた魔力を抛り所に、彼の願いの為に動いている。

宮があなりの娘、あなりがりまの母親で、ちなみに竜子の娘が外海錦にあたる。

不思議の才能においては、二人とも、どちらの楠とも対等であるが、与えられた魔力であるので、時、つまり治まる事が治まった時にはその力を失う。ただし宮の場合は封じられるだけで、子の代へと潜在する。二人とも、最後には洋子のように駆け抜けて行く。

竜子14歳時に“お宮”は小5か6？

姉妹と間違われるほど雰囲気似ている。

(★鉛筆描きのイメージイラストがあるのですが、
お見せできないのが.....以下略★)

色の黒さも手伝ってか、何とはなしにインド人めいた顔だちで、びっくりする程黒眼が大きく、時々には緑がかって光を帯びたりする。

クラスでもすごく目立つ方だが、有馬たちのようにクラスメイトを牛耳ろうとはしない。常に自分のやりたいようにやっていて、邪魔をされた時の怒りようは、余程の相手でない限り即座に逃げ返らせてしまう。

◎ あなり

青い王子と共に、封じ込められようとする亜空間に暮らしている女性である。一聞して白痴とわかる話し方をし、はかなげで、幼女のままでの“白い女性（ひと）”。

◎ 楠（くすのき） りま

妹・律立？子。縁者に清瀬律子がいる。7歳（妹3歳）の時に事故で父と兄が死亡、母が失踪し、一人で田島団地のはずれにある孤児院にひきとられた。生まれつき全盲だった妹への光と引きかえに声を奪われているので、話す事はできない。ホームでは教母たちに陰惨にいじめられ、学校ではおしであるために孤独であるが、本人の態度もどちらかといえばかなり反抗的で、しょっちゅう脱走しては木霊台のはずれの古い自分の家で時間を過ごしている。母、清瀬。 清瀬とあなりは同一人でもある。

「暗いものに気をお付なさい。暗黒の邪魔夢に。」

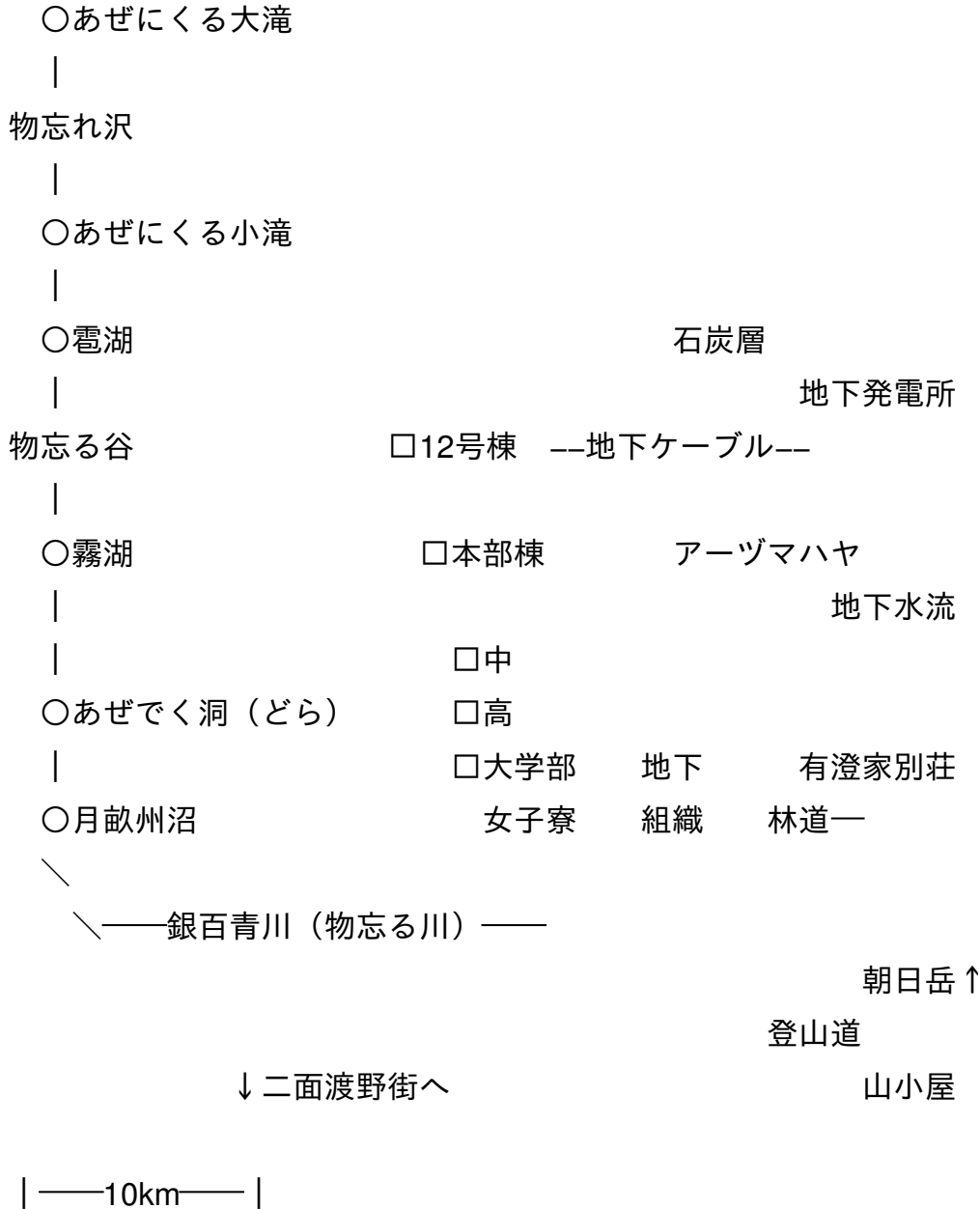
影は木に宿る。人の心をかげらせる。」

——あら、あたしの姓も木の名前だわ。

——朝日ヶ森主要部見取り——

大朝日ヶ森

閃ウラン鉱脈



二面渡（戸）野街（間地，魔地）： どうしてこんな所に集落が発生し得たのか、朝学生にもよく解らんという不思議な町。起源は学園と同じ位まで逆のぼるらしく、郊外の座敷童子（わらし）つき藁ぶき農家からバラの洋館、ごく一般的なパン屋に至るまでなんでもござれ。“気違い踊り”その他にも関係しているらしいのだがさだかではない。

◎ 有澄家の朝日ヶ森山荘について。

※ いにしへの朝日新聞の広告の切り抜きが「イメージイラスト」
として貼り付けてあるのですが、皆さんに.....以下略w

隠し階段やら何やらからくりが多くて、忍者屋敷めいた趣きを持つ家である。

◎ フィルムライブラリー

※ いにしへの朝日新聞の記事の切り抜きが「イメージイラスト」
として貼り付けてあるのですが、皆さんに.....以下略w

※ 清峰鋭とマーライシャ（日本人に変装中）／ともに12歳？の、
シャーペン描きのイラストがあるのですが.....以下同文w

コメント



[霧木里守≡畑楽希有（はたら句きあり）](#)

2016年8月3日21:06

ひみつ日記

注： d(・_・)'''

しつこいようですが、これ書いてたのは、私が小学校～中学校だった、1970年代ですので★

「2000年」とか出てくるのは、当時にとってはかな～り!! 「架空の未来の話」でした★ 同じ
要領で、文中に「白痴」とか「おし」「気違い」等という単語が出て来る点についても.....御理
解頂きたいと思います★

2006年10月31日 [連載 \(2周目・最終戦争伝説\)](#)

1985.1.10.

その野原いちめん、貴人たちは、さきほどまでは確かにいなかったのです。夕暮れの空の星々の群れのように、ひとり、またひとりと、にじむように現われては草の風ふくなかに立っているのです。

1985.1.22

もう生きていてもしょうがないと思うのにそれでも腹はへるのだ。
おつうは自分の腹のへるのを おそろしいと思い、悲しいと思い、
それでも気がつくともるまるとした青虫に手をのばしているのであった。

リステラス星圏史略
古資料ファイル
3 - ? - 0
「青い鈴の花の草原」

(暗闇の童話集)

<http://p.booklog.jp/book/108976>

著者：霧樹里守 is 土岐真扉

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/masatotoki/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/108976>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/108976>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社ブックログ